

河童のアフリカ研究(一)

河童目録

大石 高典

私は、現在「アフリカ研究」を生業として東京の大学で教えている駆け出しの大学教員である。専門分野は生態人類学と言って、人の生きざまと環境の関わりをフィールドでの観察から考えるのが仕事である。職場では、「体系的にアフリカについて教える」ことになっているが、自分が体系的に学んだことがないので毎日手探りである。むしろ、アフリカで人類学のような活動を始める前から課外活動をいろいろとやってきた。というより、課外活動をやっているうちに、気がついたら人類学をやることになっていった。俳句もそのひとつで、大学に入ってから始め、アフリカに通うようになって本格的に作り出した。

そういう私からすると、「研究者なる(になりたい)者」は、研究業績になることしかしてはいけない」というような空気の充滿している昨今の大学は不自由でたまらない。そこで、河童になってみることにする。私は、実名のほかに「御池河童(おいけのかっぱ)」という名前もっている。建前としては、俳句のひとつである。この名前は、京都大学理学部植物園の中にある池の中に棲んでいると言われている、「御池ノ河童」という河童にちなんで、友人からつけてもらった。

この友人によると、日が暮れると池の辺りから、「クッパ

ン、クッパン」という河童の啼き声がするらしい。植物園は、たかだか一・二ヘクタールしかない小さな植物園だが、今年(西暦二〇一七年)で創設から八九年になる。大正時代に田圃を造成して、縄文遺跡の上に作られた。郡場寛という京大の初代植物学教授がこしらえた、植物と小動物の楽園である。国内や東アジアを中心に集められた貴重な標本木だけでなく、「雑草も大事な観察対象である」と言う郡場教授の方針のもと、「生態植物園」のコンセプトのもとで放任主義により作り出された不思議な景観が広がっている。その真ん中の池に、河童が棲んでいるのだ。

人間でも動物でもない河童の眼から見ると、この世の中はきわめて新鮮で、遊びがいがある。なんでも研究者の世界では、論文の掲載される雑誌のインパクト・ファクターなる基準(ある論者が、査読付きの雑誌で何回引用されたかという数値)が重視されるというが、なんだかつまらない話だと思う。混沌とした世界に秩序を持ち込もうとすると、必ず失われるものがある。遊びだ。遊びこそが、学問の本質ではないだろうか。

河童になったつもりで研究者生活を見直すと、改めて気づきがあった。河童は、出勤時間を気にする必要がない。河童は、論文数を気にする必要はない。河童は、単著(研究者が一人で書いた著書で、主に人文社会系の分野で重視される)の有無を気にする必要はない。河童は、人間の好きな噂を気にする必要はない。河童は、「人間の言葉」ができない(あるいはできない振りをする)から、こういった制約から自由である。もし学

問がつまらなくなっているとしたら、その理由の一つは研究という営為そのものに官僚的思考が忍び込み、自由さがなくなっているからではなからうか。そもそも、〇×学とはこういうものでなくてはいけない、というような思考には遊びがないのだ。学問ではなかったものが、学問になる。科学ではなかったものが科学になる。その過程で、思考が保守化してゆくのは避けがたいことかもしれない。最近、私自身、日本というシステムの中で「研究者として生き延びよう」とすることに、その波に「意識的に」飲み込まれつつあることを自覚する。

河童業にあこがれた私は、数年前に小さな植物園が、やはり特権によってつぶされるかもしれないという状況が生じたとき、それに危機感を覚えた大学の非常勤職員を中心として行われ、結果的に足かけ八年の間、通産一〇一回にわたって続いた毎月異なる生き物を取り上げた自然観察会に参加することになった。その中で、私は、人間とは異なる存在の眼で世界を見るということの豊かさを学んだのだ。

人類学には、骨や化石や土器から見ると、行動や食生活を見る、文化を見るなど、アプローチは異なるにせよ、人が人を見ることの限界に挑戦するという面白味がある。それが生きた挑戦であり続けるためには、研究者には人類そのものを相対化する眼が必要なのである。人類あるいは人間を所与の概念とし、その側から云々しているだけでは無限自家撞着の蟻地獄に落ち込むばかりであろう。そのためには、人類という括り方自体が、そもそも一部の人間が勝手に作り上げたものであることを

自覚しなければならぬ。

しかし、もし私が学ぶ人類学やアフリカ研究が自己革新の学問であるとするならば、希望を捨てることもないかもしれないと思っている。私には、そのヒントを俳句に探しているところがある。例えば、俳句の伝統の一つであるとされる諧謔という自己を突き放す眼差しは、身近な世界にまだまだ無限の可能性があることを気づかせてくれるものだ。また、俳句は自分がいかなる状況に置かれていても、世界にはなにがしかの面白味があることを教えてくれる。そういう目で世界を見てゆくと、どんな時でも発見がたくさんあって退屈することはない。

最後に人間の私にとって、あまりに遠くてあまりに近いアフリカはカメルーン共和国の調査地で(を想って)詠んだ俳句をひとつ紹介させていただいて、この連載エッセイのはじまりとしたい。

出力自在電気鯨は偉大なり 御池河童



おおいし・たかのり 水壺集同人。
東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター講師。博士(地域研究)。大学では、食を通じた環境問題へのアプローチを模索するゼミを開講している。著作に『民族境界の歴史生態学—カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』。